

サウジアラビア留学生の人的ネットワーク形成に関する事例研究

田口香奈恵

1. はじめに

近年、本学ではサウジアラビアからの留学生が増加している。同国からの留学生は、2013年5月1日現在、日本語予備教育機関である別科日本語研修課程（以下、別科）の別科生、学部、大学院生を含め、88人在籍している。彼らの受け入れ先である別科をはじめ学科学部等では、急激に増加したサウジアラビアからの留学生への対応に戸惑いながらも態勢を整えつつある。彼らへの対応の中で、学習に対する姿勢や教師への態度、生活への適応などの面で従来の留学生とは異なる問題が明らかになってきた。

本稿は、来日前の日本語学習歴がない4人のサウジアラビア留学生が、来日半年後から1年の間に人的ネットワーク¹⁾をどのように形成したか、またそのネットワークにどのような変化が起こったかについて調査したものである。彼らの留学生生活をネットワーク形成の変容とその要因を明らかにすることにより、日本語学習や留学生生活の支援環境を整え、問題解決の選択肢が広がると考えた。

2. 先行研究

人的ネットワークの形成に関する先行研究の多くは、日本語学習歴のある短期留学生を対象にしたもので、ネットワークの形成の要因、日本語学習への影響について探っている（内海・吉野 1999, 加藤・谷部 1997, 牲川・高村 2012, 崔・加藤 2012, 古本 2008）。

崔・加藤（2012）は、3人の韓国人留学生を対象にインタビューを実施し、ネットワーク形成・維持について阻害要因と促進要因を明らかにしている。古本（2008）は、3人の留学生に対しソーシャルスキルトレーニングを行い、そのスキルの変容と対人関係形成の阻害要因を留学生と日本人側から明らかにしている。両者に共通する留学生のネットワーク阻害要因は、「日本人側の留学生や留学生の国に対する関心の無さ」「日本人側の異文化に対する理解の無さ」である。古本（2008）は日本人側の要因として「留学生の日本人に対する関心の無さ」「自分の語学力不足」を挙げている。ここから、留学生はネットワーク上に存在する日本人に

対して、自分についてもっと関心を持ってほしいと望んでいることが窺える。

3. 調査概要

3.1 調査対象者

調査対象者は、サウジアラビア留学生4名（男性）である。彼らは3年半の特別プログラム第1期生である²⁾。1年半の日本語予備教育後、大学学部3年次に編入し、学士号取得後は帰国し技術職業訓練を実施する短期大学（彼らの母校）で教員になる予定である。このプログラムの第1期生は日本各地の日本語予備教育機関で日本語を学んでいる。

調査対象者の英語学習歴は1年間～6年間で留学生によって異なる。調査期間中の年齢は23～25歳、全員来日前の日本語学習経験はない。2012年9月に来日し、本学別科にて文字の導入から日本語を学んでいる。調査期間中は別科2セメスター目にあたり、4人とも同じクラスで『みんなの日本語 初級Ⅱ』を学んでいた。別科在籍の留学生のほとんどは構内にある大学所有の寮に入るが、調査対象の留学生は学外の集合住宅に住んでいる。従って、入寮した留学生と比べてクラスメート以外の別科生との日常的な接触や交流は少ないことが推測される。

本プログラムの受け入れ機関は本学ではなく学外の機関で、これまでに開発途上国を中心とした多数の海外留学生の受け入れを支援してきた実績を持つ。来日直後は、日本滞在に必要な手続、住居の選定など生活の基盤を整える支援を通じて修学に専念する環境づくりを行っている。また、一人ひとりが十分な留学成果を身につけられるよう、個々の留学生と定期的に面談することで、学業面、生活面および健康面の状況をモニターしている。

3.2 方法

サウジアラビア留学生の人的ネットワークを明らかにするために、表1の日程で全3回のインタビューを実施した。インタビューは全て日本語で行い、録音し文字化した³⁾。1回目のインタビューでは、ネットワークマップ⁴⁾を描き、それを見ながら補足説明をしてもらった。2回目以降は自分が1回目に描いたネットワークマップに変化があったか、それはどのような変化かを説明してもらい、近況報告や心境の変化なども話してもらった。

表1 インタビューの日程と内容

回	時期		インタビューの主な内容
1	2013年 6月1日～22日	来日約9ヶ月後 (2セメスター目の中間点)	ネットワークマップ作成 補足説明
2	2013年7月29日	2セメスター目終了日	ネットワークの変化の有無
3	2013年 9月9日～11日	夏休みの帰国（1年ぶり） 後の夏期補講中	ネットワークの変化の有無 夏休みの様子 新学期への抱負・希望

ネットワークマップとは、日本語教育のアクティビティ教材⁵⁾に紹介されていた「私のネッ

トワーク」を参考にしたものである。「私」を用紙の中心に置き、「日常つながりのある人やものと自分との関係を図式化（中村他 2005）」するもので、「いろいろな人が自分のまわりにいて、さまざまな形で自分を支えてくれること」がわかる。中村他（2005）によると、学習者の日本語学習動機を高める人たちの存在を知ることができる方法であると述べている。ネットワークマップの作成は、プライバシーに関わる点でもあるため配慮も必要である。また、学習者の判断によってすべてを自己開示する必要はない。従って欠落している、可視化されない、あるいは単に描き忘れたネットワークがあることも否めない。しかし、ネットワークマップの作成以外にインタビューを実施することによって、それらの点を部分的ではあるが補うことができると考えた。

留学生へのインタビューとは別に、人的ネットワークに登場した人物の中で、連絡が取れる者と連絡を取り、留学生との交流についてインタビューをした。また補足分析資料として、アラビア語での日記（テーマを決めて書かせた作文）も扱う⁶⁾。

4. 結果と考察

ここでは、4人の留学生が描いたネットワークマップの内容がどのようなものだったかを量的・質的側面から分析し、考察を加える。

4.1 ネットワークの分類

本学留学生のネットワークについて調査した論文に阿曾村他（2002）がある。そこでは「ネットワークの種類」「接触場所」「接触場面の参加者」「形態」「機能」「目標」の6点について分類を行っている。本調査の留学生と阿曾村他（2002）の留学生の来日目的や住居環境は異なるが、日本語学習の教育環境は同質であることから、本稿ではこの中の「形態」「目標」以外の分類に倣い、留学生4名のネットワークの分類を試みた。阿曾村他による「ネットワークの種類」と「機能」は以下の通りである。

<ネットワークの種類>

恒常的ネットワーク：繰り返し起こると考えられるもの（例）授業、友達とのおしゃべり

散発的ネットワーク：何回か継続するが、長期的に持続しないもの

（例）交通事故処理のために保険会社の人と話をする

単発的ネットワーク：一回限りのもの（例）新聞の勧誘を断る

<機能⁷⁾>

人間関係維持機能：人間関係の維持を目的とするやり取り

（例）道で管理人さんに会ったときに挨拶をする。

学習機能：学習を目的としたやり取り

（例）授業中先生の言葉がわからないときに友達に意味をたずねる。

学校生活遂行機能：学内での生活を円滑に遂行することを目的としたやり取り

例) 体育館で、係の人にバスケットボールを借りたい旨を伝える。

日常生活遂行機能：学外での生活を円滑に遂行することを目的としたやり取り

例) 店に行って、値切る。

表2はネットワークの分類を示したものである。調査を行った約半年の間に変化したネットワークもあるため、3回のインタビューで登場した参加者を全て記載する⁸⁾。「接触場面の参加者」とは、日本人と日本人以外で、それぞれ具体的にどのような立場の人かを示す。表中の□はネットワークが新たに追加されたもの、()はネットワークが消滅したものである。「接触場面の参加者」欄のアルファベットの名前がないものについては、複数の参加者を示す。

留学生A～Dは、恒常的ネットワーク、つまり繰り返し起こっているネットワークを維持している参加者が多い順に左から列挙した。また、留学生A～Dの中で接触場面の参加者として登場する人物が多い順に、学内外別に、上から並べた。

表2 ネットワークの分類

・ネットワークの種類

(恒常的ネットワーク◎／散発的ネットワーク○／単発的ネットワーク△)

・機能(人間関係維持機能♥／学習機能◆／学校生活遂行機能♣／日常生活遂行機能♠)

接触場所	接触場面の参加者	留学生 A	留学生 B	留学生 C	留学生 D
学内	サウジアラビア人の友達	◎／♥	◎／♥◆	◎／♥	◎／♥
	サウジアラビア人の先輩(学部・院)	◎／♥◆	◎／◆	○／◆	
	日本語ボランティアチューター(今学期)	◎／◆	(○／♥)		(◎／♥)
	日本語の先生	◎／◆	◎／◆	○／◆	
	クラスメート		◎／♥◆	◎／♥	
	日本語授業のボランティア			○／◆	
	日本語ボランティアチューター(先学期)	□／◆			
学外	日本人の友達(Yさん)	△／♥	○／♥	○／♥	○／♥
	ホームステイ	◎／♥♠		○／♥	
	本プログラムの受け入れ機関	○／♣	○／♣♠		
	国の家族			◎／♥	◎／♥
	Facebook	□／♥	◎／♥		
	サウジアラビアの友達			△／♥	△／♥
	日本人の友達(Tさん)	◎／◆			
	近所の人			○／♥	

表2を見ると、調査対象の留学生が学内で恒常的・散発的ネットワークを維持している接触場面の参加者は、サウジアラビアの友達や先輩、日本語ボランティアチューター、先生など、共通している。学外の参加者「日本人の友達（Yさん）」とは、本学の卒業生で、在学中にアラビア語圏の留学生と積極的に関わり友達関係を維持していた人物である。卒業後も留学生各々が電話やLINE⁹⁾で連絡を取り合っている。

夏休み中に実施された3回目のインタビューでは、ネットワークが変化している留学生はいなかった。留学生A・B・Dの追加・消滅したネットワークは、2セメスター目に発生していた。

共通点が見られる一方で、留学生によってネットワークの広がりや参加者との関わり方が異なっている。ホームステイは全員体験しているが、その関係を維持しているのは留学生AとCだけである。

留学生Aは、学内外を問わず様々な人物と交流し、その機能も4種にわたる。留学生Aのネットワークマップには、クラスメートや家族は描かれていなかった。1回目と2回目のインタビューの間（約2か月間）に、新たに2人参加者が追加された。学外の参加者「日本人の友達（Tさん）」とは、アラビア語ができる本学の卒業生で、サウジアラビア人の先輩に紹介してもらい知り合っている。毎週末近隣の町で会い、日本語教材を使って会話のレッスンを受けている。また、ホームステイの家族とも頻繁に電話などで連絡を取り合い、再会もしている。

留学生Bは、学内を中心にネットワークが展開されている。その中の1つは調査期間中に消滅している。プログラムの受け入れ機関とは、他の留学生と異なる関わり方をしている。具体的には、新学期に来日する同プログラムの後輩留学生を新居が見つかるまで一時的に自宅に滞在させるため、受け入れ機関と連絡を取り合っていた。既にプログラム2期生を自宅に迎え入れ、3期生も受け入れる予定である。

留学生Cは、留学生A同様学内外を問わず広いネットワークがあるが、関わり方は留学生Aほど頻繁ではなく、人間関係維持機能が中心である。「近所の人」とは自宅近くで挨拶をする程度の仲で、一度近所のレストランへ食事に行っている。

そして、4人の中で最も小さいネットワークマップを描いた留学生Dは、人間関係維持機能のみのネットワークを保持している。その中の1つは調査期間中に消滅している。

4.2 ネットワークの変容

次に、調査期間中にネットワークが変化した留学生3人について、その要因を探るために、日本語学習・日本人に対する考え方の変化などについてインタビューや日記の内容を踏まえながら分析を行う。

4.2.1 ネットワークが拡大した留学生Aの場合

留学生Aは4人の留学生の中で、唯一ネットワークが拡大した学生である。来日約半年後の日記を見ると、来日当初は生活や日本語学習に対して不安を抱いていたが、その後不安が解消されたことが綴られている。インタビューの中でも、来日当初はアラビア語をよく話し、日

本人の友達ではできなかったが、2セメスター目の現在は日本語も以前より話せるようになり、多くの日本人との交流があり、また新しい人に会うことは楽しいと話している。

【留学生 A の日記：2013年4月26日¹⁰⁾】

「来たばかりのころは自分が日本で生活や日本語の勉強をうまくできるのかと不安だった。今では全く不安が無くなり楽しい毎日を送っている。日本語学習に関してはやはり難しいものだと思う。徐々に良くなっていくとは思う。」

不安なく楽しい日々が送れるようになった背景には、ネットワークの拡大が窺える。留学生 A が自己のネットワークの中で役に立っている・楽しいと答えたものは、日本人の友達 T さん、ホームステイ、サウジアラビアの先輩だった。この3者には知人の紹介により出会い、その後ほぼ毎日あるいは毎週定期的に会っている。A 以外の留学生3人も先輩や個人的な知り合いとネットワークを保持しているが、A ほど頻繁に連絡を取り直接会うことはしていない。崔・加藤（2012）は、ネットワーク維持の促進要因の1つに「接触する頻度」を挙げている。留学生 A も頻繁に連絡を取ることで、順調にネットワークが維持できていることがわかる。

4月下旬に初めて会ったホームステイの家族とは、毎日電話すると話している。また、毎週末、ホームステイ先の子どもが本学のスポーツクラブに来るため、そこでも会っている。母の日にホームステイ先を再訪し料理を振る舞ったり、風邪を引いた時は薬を自宅まで届けてもらったりしている。

日本人の友達 T とは、3月に知り合い、日本語学習を継続させている。日本人の友達 T の談話を以下に紹介する。日本人の友達 T の談話によると、留学生 A は真面目で寡黙な面があるが、日本語学習には積極的であることがわかる。

【日本人の友達（T さん）の談話：2013年6月1日インタビュー】

「一緒に勉強するテキストを選び、会話の勉強をしている。初見の会話（文章）はすらすら読めないが、宿題として CD を聞いて練習してくるよう指示すると、翌週にはすらすら読めるようになっている。勉強が好きだという印象を受ける。日本語の質問に対して単語で答える感じ。真面目すぎて、話していても盛り上がりに欠けるところがある。」

留学生 A は日本語スピーチコンテスト¹¹⁾の準備にもネットワークをうまく利用している。留学生 A は、スピーチコンテストへの出場と入賞を目指し、本番一か月以上前から準備に取り掛かっていた。インタビューによると、まず、サウジアラビアの先輩に、アラビア語から日本語に自力で翻訳した原稿をチェックしてもらっている。その後、数人の日本語の先生や日本語ボランティアチューターに原稿を見てもらい、さらに先学期に日本語ボランティアチューターだった学生に再び連絡を取りスピーチの練習を依頼している。先学期の日本語ボランティアチューターとは先学期終了時にネットワークが消滅していたが、留学生 A から連絡を取り、再開されたものである。日本語スピーチコンテストでは3位入賞を果たした。

留学生 A の行動を見ると、生活面、日本語学習面の両面を充足させるために、新旧のネットワークを駆使し、自ら連絡を取る積極的な態度が展開されている。古本（2008）は、日本人の友達を作り彼らと上手につき合うために重要な点について、留学生の認識が「日本語の向上」から「社会的知識を学習することや積極性である」ことに変容したことを明らかにしている。留学生 A が学内外を問わず自己のネットワークを広げ維持している点は、古本の「社会的知識を学習」し「積極性である」ことと一致する。

4.2.2 ネットワークが縮小した留学生 B と D の場合

留学生 A に対して、ネットワークが縮小（消滅）した留学生 B と D の事例を見る。インタビューや日記の内容から、両者に共通してみられる点が2点に集約できる。一つは日本人が閉鎖的である点、もう一つは留学生自身の消極的な態度である。また、留学生 D に見られた挫折による諦めの態度を3点目に述べる。

1) 日本人が閉鎖的であること

以下は、留学生 B と留学生 D の来日約半年後の日記である。滞日期間が長くなるにつれ日本での生活に慣れ、日本人や日本社会に対し一定の評価をしているが、日本人は「閉鎖的」と述べている（日記中の下線は筆者が記入）。

【留学生 B の日記：2013年4月26日】

「最初のころは、何もかもが違っていて、これまでのサウジアラビアでの生活と異なる別世界に来ている思いだった。知り合いもなく、日本での生活とその社会について自分が持っている情報や知識はわずかのものだった。毎日の生活の中で、少しずつではあるが、知り合いの和（サウジ人コミュニティー）が広がり、自分が前に比べれば日本の生活に慣れてきたと思う。日本人の人に対する丁寧な接し方などは嬉しいが、日本人はちょっと閉鎖的だという印象が残る。」

【留学生 D の日記：2013年4月26日】

「“日本人”という人物像：思いやりのある、物腰の柔らかい国民—積極的に困っている人を助けるところが素晴らしい。静かで落ち着いた物腰—電車や込んでいるところ等でも、皆静かで騒いだりしない様子が良い。清潔感—公共の場や道路などどこへ行ってもゴミが無く清潔感であふれている。

嫌なところ：閉鎖的で社交ではないところ—来てからもう7カ月になるが、未だに友達一人もできない状態が続く。日本人の友達がいないことが、言語習得へのマイナス面が大きいと考える。」

インタビューにおいても、「サウジアラビアでは誰とでも話すが、日本人は知らない人と話しながらない（留学生 B）：2013年6月22日」「近所の人に挨拶してもそれ以上は仲良くなれな

い。声をかけても返事をしてくれない時がある（留学生 D）：2013年 9 月11日」など、日本人が閉鎖的であることを指摘している。

2) 留学生自身の消極的態度

留学生 B と D は日本人の閉鎖的側面を指摘しているが、一方で自分自身のネットワーク参加者との関わり方には消極的な様子が見られる。両者ともホームステイに参加しているが、その後連絡を取り合っていない。学期途中（2013年 7 月上旬）で日本語ボランティアチューターを解消した理由を「ラマダン¹²⁾に入った」ためだと述べている。

両者は、ネットワーク形成が困難な理由を「学外で会って話したいが、学生は毎日アルバイトで忙しい。（留学生 B）：2013年 6 月22日」「（日本語ボランティアチューター活動では）サウジアラビアの文化の影響で、女性と話すのは恥ずかしい。こちらが話しかけても相手は恥ずかしそうにしている（留学生 B）：同上日」「（同チューター活動で）留学経験のない日本人学生と話すのはあまり楽しくない（留学生 B）：同上日」「日本人の友達には欲しい。日本語が上手になれば友達ができる（留学生 D）：2013年 6 月 8 日」など、自己ではなく他者に担わせている。この点は、古本（2008）の留学生が対人関係形成の困難な理由を「自分たちよりも相手の知識不足と関心の無さ」だと指摘している点と重なる。

留学生 B の日本語ボランティアチューターだった日本人学生の一人に、チューター活動支援中の留学生の様子についてインタビューした。すると、以下の談話で示すような意見が得られ、留学生 B とは異なる認識が見られた。

それは、チューター活動に消極的だったのは留学生 B であると捉えている点 (a)、恥ずかしがる様子を見せていない点 (b) である。留学生 B は、日本人からの働きかけには応じない一方で、自国の文化の紹介相手 (c)、情報収集の手段 (d) としてネットワークを利用している。このような態度は、一方的で都合が良いと日本人学生に解釈されてしまう可能性がある。留学生 B と日本人学生の相手に対する認識のずれが、ネットワーク形成を阻害している要因の一つと考えられる。

【日本語ボランティアチューターの談話：2013年9月27日インタビュー】

「チューターの活動開始から数回は楽しく参加していたが、後に留学生 B から辞めたいと申し出があった。その後も LINE で活動日時を (a) 連絡し声をかけ続けたが、忙しそうで断られることが多かった。嫌な思いをさせたこともなく、(b) 自分自身が恥ずかしがっている様子も見せたことはない。

一度、留学生 B の自宅に招待され、アラビア料理を御馳走してもらった。(c) 自分の文化を伝えたいという気持ちがあったようだ。偶然礼拝の時間と重なり、目の前で礼拝も見せてくれた。

バーベキューへの誘いや、車購入のために店を紹介してほしいなど (d) 月に何回か急に連絡してくる。チューター活動最終日は来てくれた。日本人でまたサポートしてくれる人が欲しいという様子だった。」

3) 挫折による諦めの態度

留学生 D のインタビューの中で、ネットワークを維持したり拡大したりすることを諦める態度が見られた。

留学生 D は、「日本語で話しかけても英語で返答された（2013年 6 月 8 日）」「スーパーの駐車場で、車に荷物を入れるおばあさんに手伝いを申し出たが断られた（2013年 7 月 29 日）」「電車で席を譲っても応えてもらえなかった（2013年 9 月 11 日）」「店で見知らぬ子どもに手を振ったが、その親に怖い顔をされた（2013年 9 月 11 日）」など、学外の日本人と積極的に関わろうと試み、それが成功しないで挫折する経験を繰り返している。留学生 D は「日本語力向上による日本人の友達の増加」を目指し、日本語力向上とともに D 自らの努力をしている。この努力は対人関係形成への積極性とも捉えられる。しかし、その積極性は、留学生 A とは異なり、面識のない日本人へ向けられたことで失敗している。インタビューの毎に留学生 D は「日本人の考え方がわからない」とコメントしている。これは、挫折が繰り返されたことで得られた D の結論とも推察できる。別科在籍の留学生のほとんどが構内にある大学所有の寮に入るが、留学生 D は学外の集合住宅に住んでいる。入寮した留学生と比べてクラスメート以外の別科生との日常的な接触が少ないことも、留学生 D のネットワーク形成の視点が学外に向けられた要因の一つと考えられる。

また、自分の日本語の発音が悪いことを気にしており、サウジアラビアの先輩がいる際は発音の悪さを指摘されるため、日本語を話したくないと言っている（2013年 9 月 1 日：3 回目のメンタビュー）。日本語の発音に自信をなくし、日本語を話す機会を失っている様子がわかる。

3 回目のインタビューで、今後のネットワーク形成について質問したところ、以下のようなコメントがあった。

【留学生 D のインタビュー内容（要旨）：2013年 9 月 11 日】

「日本人の友達はまだいない。以前は友達が欲しかったが、今は欲しくない。近所の人に挨拶してもそれ以上仲良くなれない。声をかけても返事をしてくれないこともある。今後の日本語使用は教室だけに止める。それでも日本での生活は気に入っている。ホームステイはまた参加したい。以前のホームステイ先ではなく、子どもがいる新しいホームステイ先を望む。」

従来の方法ではネットワークを維持・形成できないことに気づき、新たなホームステイ先と繋がることで心機一転を図ろうとする姿勢が見られる。牲川・高村（2012）は、留学生が特に重要と認識していた人的ネットワークは、学内のサークルよりも学外の比較的年長者との交流だったことを明らかにしている。留学生 D も学外での紹介による交流に視点を移そうとしている。今後のネットワーク形成に期待したい。

5. まとめ

本稿では、ネットワークマップを用いてサウジアラビア留学生4人の人的ネットワーク形成と変容について調査し、その要因を探った。

その結果、人的ネットワークの変容要因は、接触場面の参加者との関わり方で異なることが明らかになった。ネットワークの形成・維持には、人間関係維持や日本語学習だけではなく、学校生活や日常生活を円滑に遂行させる機能を追求することも重要である。また、学内外を問わない新旧のネットワークを駆使した積極的な態度が促進要因であることも提示された。一方で、ネットワークを阻害する要因としては、留学生の日本人に対する否定的評価、対人関係形成が困難な要因を自分ではなく相手に負わせている点、相手との認識のずれなどが挙げられる。

以上のように、4人の留学生は各々に特徴的なネットワークを形成していたが、3回目のインタビューの中で全員が新学期（3セメスター目）の新クラスについて同様の希望を述べている。それは、新クラスにはサウジアラビア人は2～3人までという意見である。同じクラスに同国人が多数在籍していると、アラビア語で話す機会が増え日本語を話す機会が奪われる、日本語学習に悪い影響を与えるためという理由である。3セメスター目は編入試験の学期にあたり、日本人学生に交じり専門科目を日本語で学ばなければならない編入後の留学生活が具体的に見え始める時期である。その時期に4人のネットワークがどう変化していくか、期待しながら調査を続けたい。

巻末資料 ネットワークマップ用紙

クラス： _____ 名前： _____

あなたの日本のネットワークをかいてください。「私」はどのような人や場所とつながっていますか。思いつく人（場所）をできるだけたくさんかきましょう。つながりの強さによって、線の太さを変えてください。線が太いほうがその人（場所）とのつながりが強いことを表します。



注

- 1) 本調査では、本学留学生のネットワークについて調査した論文、阿曾村他（2002;94）に倣い、「人的ネットワーク」を以下のように定義する。フェース・ツー・フェースの人的ネットワーク場面、及びメールや電話、ソーシャル・ネットワークキング・サービス（SNS）を媒介として特定の人物とコミュニケーションをする場合である。
- 2) このプログラムで本学に在籍している第1期生は9名おり、全員日本語予備教育のため別科に所属している。9名のうち4名が本稿の調査対象者である。本学にはサウジアラビアからの留学生が、調査対象者4人を含め88人在籍している（2013年5月1日現在）。しかし、同プログラム留学生の受け入れは彼らが初めてで、同プログラムの先輩はいない。
- 3) 2回目は録音機器をインタビューに持参しなかったミスで、録音をしていない。
- 4) 巻末資料参照。
- 5) 中村律子他（2005）『人と人をつなぐ日本語クラスアクティビティ50』ASK
- 6) アラビア語で書かれた日記の日本語訳は、アラビア語母語話者に依頼した。
- 7) 阿曾村他（2002）では、「機能」の定義はなく例の列举に止まっているため、本稿ではそこに筆者が考えた定義を付け加える。
- 8) ネットワークマップには描かれていなくてもインタビューで登場した人物も記載した。
- 9) LINEとは、無料で通話やメールが楽しめるコミュニケーションアプリで、スマートフォンで利用できる。
- 10) 以下、年月日はインタビューの日付、日記の提出日を示している。
- 11) 日本語スピーチコンテストは、毎年春学期7月上旬に実施される別科主催の行事である。初級から上級までレベルごとに代表者を選出し、その代表者がコンテストに出場する。2013年度春学期は7名が出場した。
- 12) ラマダンとは、イスラム社会で使われているヒジュラ暦の第9月のことで、この月の一か月間は毎日イスラム教徒の義務として日の出から日没まで断食を行う。

引用文献

- 阿曾村陽子・阪本史代・加藤好崇（2002）「東海大学学部留学生日本語使用実態調査プロジェクト—中間報告（第2部）：東海大学留学生の持つネットワーク—」『東海大学大学紀要』留学生教育センター22 pp.89-94
- 内海由美子・吉野文（1999）「短期留学生の日本語実使用場面の実態と分析—ネットワークの観点から—」『千葉大学留学生センター紀要』5 pp.30-55
- 加藤清方・谷部弘子（1997）「短期留学生の学習ネットワーク」『平成8年度文化庁日本語教育研究委嘱 国内の日本語教育ネットワーク作りに関する調査研究—最終報告書—』日本語教育学会 pp.113-121
- 牲川波都李・高村竜平（2012）「短期交換留学生の居場所感覚—印象に残る／継続する人的ネットワークの契機—」『秋田大学国際交流センター紀要』1 pp.27-42
- 崔慧璘・加藤好崇（2012）「短期留学生の人的ネットワークの研究—韓国からの三人の短期留学生に対するケーススタディー—」『東海大学紀要国際教育センター』3 pp.29-45
- 中村律子・浅見かおり・金子広幸・宮崎妙子（2005）『人と人をつなぐ日本語クラスアクティビティ50』ASK
- 古本裕美（2008）「留学生の対人関係に関する認識とスキルの変容過程」『WEB版日本語教育実践フォーラム報告』
- 「留学生受け入れ支援」一般財団法人日本国際協力センター
ホームページ <http://sv2.jice.org/jigyoku/ryuugakusei.htm> （2013.10.31）